

史跡和歌山城第33次発掘調査 現地説明会資料

平成22年12月23日（木・祝）午後1時30分～3時30分

和歌山城管理事務所・和歌山市教育委員会

（ 073-435-1044 ） （073-435-1194）

和歌山市は史跡和歌山城の保存整備事業を進めています。平成 18 年には御橋廊下^{おはしろうか}の復元整備が完了し、一般公開されています。その後、周辺（二の丸西部）整備のための遺構確認調査を実施してきました。二の丸は藩主が生活し、政治を行ったところで、西部は大奥と呼ばれる男子禁制のエリアに相当します。平成 20・21 度には御橋廊下に連なる二の丸北西部^{ごきゆうそく}（御休息と呼ばれる藩主がくつろいだ場所）で調査を行い、浅野期（江戸時代初頭）の石垣、徳川期（江戸時代前期～末期）の大奥内部と周囲の通路部を区画する土塀、石組の排水施設、二の丸御殿の坪庭に設けられた池（漆喰池^{しっくいけ}）など多くの遺構を検出しました。

本年度の調査地点は昨年度の調査で漆喰池を検出した坪庭の南側隣接地にあたり、文政 8 年(1825)の絵図「和歌山二ノ丸大奥^{わかやまにのまるおおおく}当時御有姿之図^{とうじおんゆうしのず}」などにみえる二の丸御殿北西部の建物（御座之間^{ござのま}・御対面所^{ごたいめんしょ}御上段^{ごじょうだん}・御対面所^{ごたいめんしょ}御下段^{ごげだん}）や浅野期石垣の延長部分などの遺構の存在が推定される場所でした。

1. 発掘調査の概要

- （1）遺跡名：史跡和歌山城
- （2）所在地：和歌山市一番丁3番地内
- （3）調査主体：和歌山城管理事務所
調査指導：和歌山市教育委員会 文化振興課
調査機関：(財)和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班
- （4）調査期間：平成22年10月27日～ 継続中
- （5）調査面積： 250㎡

2. 調査の成果

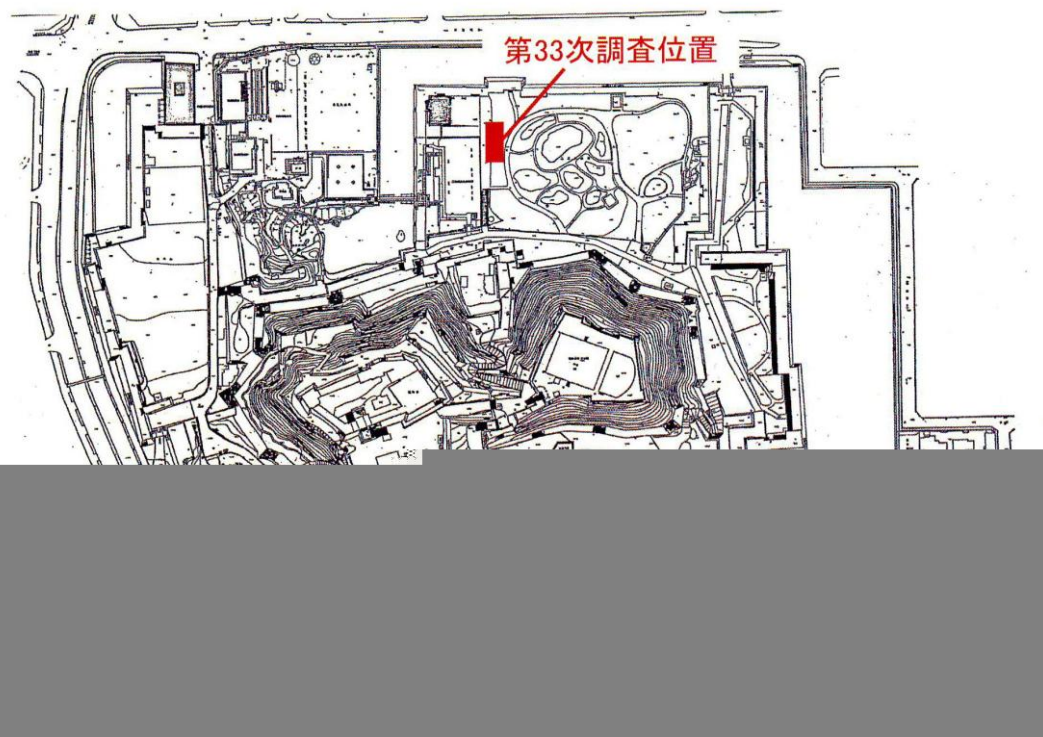
発掘調査を実施した和歌山城二の丸は、建物などを描いた絵図（「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」など）が残されており、その絵図をもとに、ある程度遺構を推定しながら調査を進めることができました。そして、実際に絵図と合致する江戸時代後期の遺構を確認しました。遺構は二の丸御殿の建物の柱を据えたとみられる大小の礎石^{そせき}を17基、礎石の下部施設である根石^{ねいし}2基、御座之間の床下に位置する地鎮・鎮壇土坑^{じちん ちんだんどうこう}1基、昨年度に検出した漆喰池^{しっくいけ}の導水口^{どうすいこう}につながる土管^{どかん}1条などを検出したほか、絵図には描かれていない江戸時代初頭の浅野期石垣の南側延長部分を18mにわたって確認しました。

【主な検出遺構】

礎石 建物の礎石を17ヵ所で確認しました。ほとんどが砂岩^{さがん}の自然石で、大きいものは直径0.7m～1m、小さいものでは直径40cm程度の規模を測ります。なかには礎石上面に一辺21cmを測る方形の柱痕跡がみられるものがあり、そのことから礎石の上には角柱が据えられていたものとみられます。礎石のなかには

方柱状に加工された
ものが2基あり、その
ひとつは花崗斑岩（熊
野地方の石材）を用い
たものです。

これらの礎石は東
西及び南北方向に並
ぶことから、その置か
れた位置は絵図にみ
える建物の柱位置の
いずれかと対応する
ものと考えられます。
ほとんどの礎石は側
面を江戸時代後期の
盛土に覆われている
ことから、それ以前に



史跡和歌山城第 33 次調査位置図

据えられていた礎石を江戸時代後期の建物建て替えの際にそのまま再利用したものとみられます。あきらかに江戸時代後期のものは、盛土上面にそのまま置かれたもの1基と盛土上面から掘り込まれた穴に据えられたもの3基があります。

根石 建物の柱を支える礎石の沈下を防止するための下部施設で、礎石を据える位置に直径 60～70 cm の穴を掘り 20～30 cm 大の結晶片岩を敷き詰めたものです。調査区の西側で2基を確認しました。

地鎮・鎮壇土坑 直径約 60 cm、深さ約 25 cm の穴を掘り、一辺 15 cm 程度の瓦片を詰めて半分の深さまで埋めた後、そこに直径 35 cm、深さ 12 cm の未使用の播鉢を伏せ、土をかぶせて埋めたものです。御座之間の床下にあたる場所で検出したもので、その特殊な状況から江戸時代後期の建て替え時の地鎮・鎮壇の遺構と考えられます。

土管 調査区の北西隅で検出した土師質の土管で、5 個が連結した状態を保っていました。昨年度に調査を行った北側隣接地で確認した漆喰池の導水口につながるもので、ひとつの土管のサイズは直径約 12 cm、長さ約 60 cm を測ります。土管連結部は隙間を漆喰で塗り固め、漏水を防いだ工夫がみられます。

浅野期石垣 二の丸西部は江戸時代前期（徳川期）に西堀を埋立て拡張したとされる部分ですが、この拡張前の西堀石垣（浅野期）を確認しました。石垣の上部は埋め立てのため石材が抜き取られていましたが、深さ 1.6m、延長約 18m 分を検出しました。昨年度の調査では長さ約 9m 分を確認しており、今回のものはその南側延長部分にあたります。

石垣は南北方向の西側に面を持つもので、砂岩の大きな自然石を^{のづらつ}野面積みにしており、^{まづめいし}間詰石（大きな石の隙間に詰める小さな石）に結晶片岩の割石を用いています。砂岩石材は自然石を数個に分割したものもあり、^{やあなあと}矢穴跡（石を割るときに^{くさび}楔を入れた穴の跡）や石垣刻印（石材表面にみられる記号）、石垣面をノミ加工で平坦化している部分などもみられます。

このような石垣と同じ積み方のものは、現在の和歌山城では全く目にすることができませんので、和歌山城の石垣の変遷を考える上で貴重な例であるといえます。

3. まとめ

今回の発掘調査では、和歌山城二の丸御殿に関連する遺構を確認することができました。検出した礎石、根石、地鎮・鎮壇土坑などの遺構は文政8年（1825）の絵図「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」に描かれた御座之間・御対面所御上段・御対面所御下段に関するものとみられ、江戸時代後期の藩主に関わる重要な遺構と考えられます。また江戸時代初頭の浅野期石垣を確認したことも和歌山城の石垣の変遷を考える上で貴重な調査成果です。

今回の調査成果は、今後、和歌山城二の丸の保存整備を検討していく上で貴重な資料であるといえます。



調査地全景写真（北から）



地鎮・鎮壇土坑（西から）



柱の痕跡を残す礎石（西から）



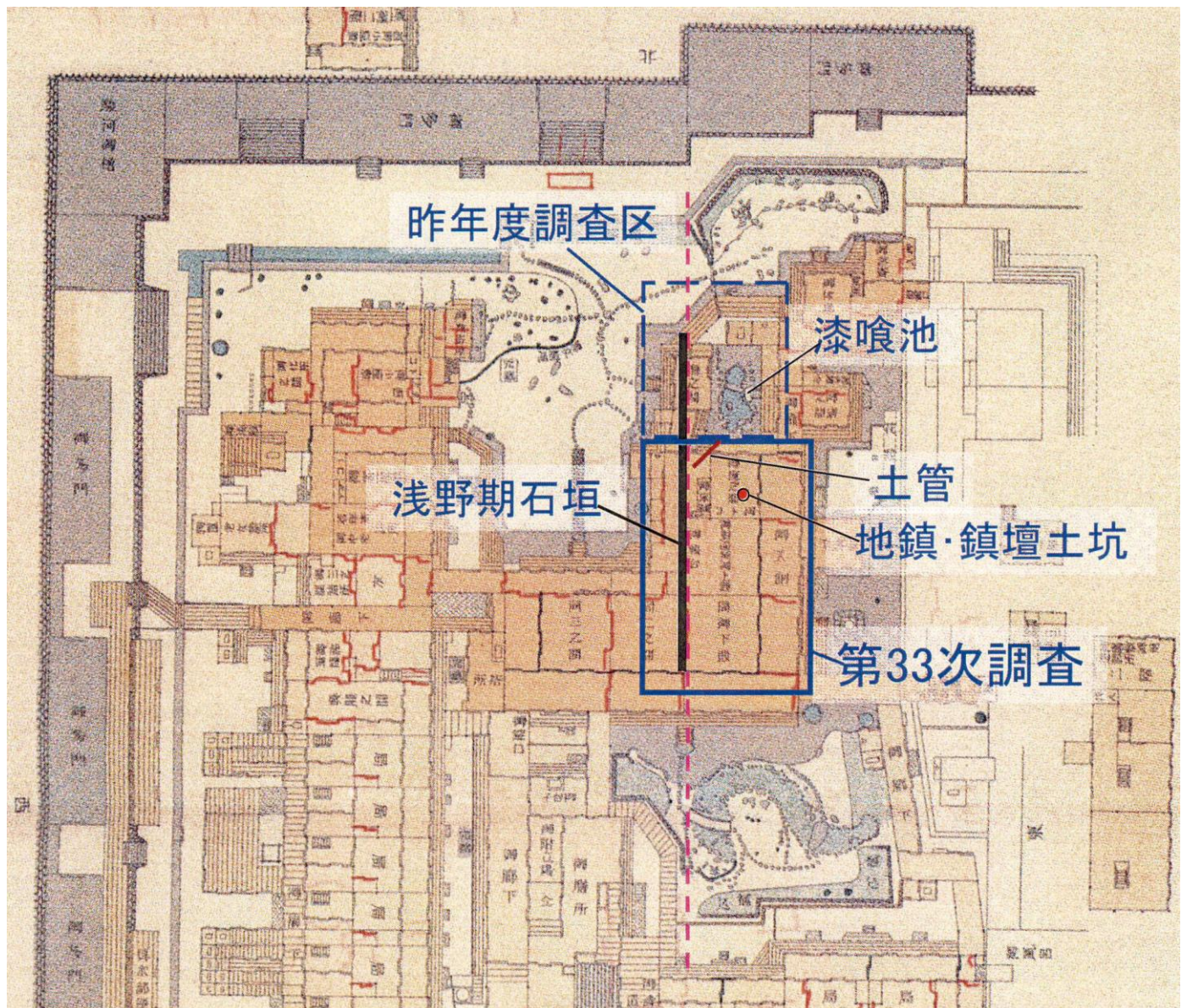
漆喰池の導水口につながる土管（北東から）



浅野期石垣（北西から）



刻印のある石垣石材（西から）



わかやまにのまるおおくとうじおんゆうしのず

史跡和歌山城第33次調査（「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」に加筆作成）